

---

# 零崎姫識の人類観察

卯月夕吊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

零崎姫識の人類観察

### 【Nコード】

N8413Z

### 【作者名】

卯月夕吊

### 【あらすじ】

殺人鬼集団・零崎一賊の末っ子、零崎姫識。彼は零崎の中でも天才で、普通で、異端だった。妖刀「血濡れの舞姫」を手にした彼の人間関係と、人類観察の物語が始まる。 本作は戯言シリーズ、人間シリーズの二次創作ですが原作にはあまり関わってきません。オ리지ナル色強めの予定です。

## 九条千秋

九条千秋は普通の子供である。

京都在住、現在3歳。

親は1歳の誕生日に事故で他界。千秋には親の記憶はない。

また、生まれつきの喉の病気で声がうまく出せない。喋ることは出来るが、大声を出すことは出来ない。

母親が外人で、その髪は日本人とは違うクリーム色。男の子だが、髪は伸ばしている。瞳は茶色。

そのせいで度々女の子に間違えられる。

だが、日常は普通ではなくなった。

血の海が広がっていた。

そこに横たわる人は皆、腹、もしくは背中、もしくは首、もしくは手や足、もしくは頭、その他諸々から血を流している。

黒いスーツにサングラスや、顔に傷跡などから、まさしく”あっち側”の職業だろう男たち。

唯一の例外は、その中に立っている場違いな小さな子供。返り血を一滴も浴びず、ただ男達を見下ろしている。

この場所 よくありがちな倉庫だ には、濃密な血の匂いが充満している。しかし、それに顔をしかめるでもなく、千秋はただそこに立っていた。

犯人は、千秋ではない。

当たり前だろう。こんな小さな子供に、何が出来るというのか。

千秋は、ごく普通の、重い経歴を持ったただの子供だ。小説によく

ある、実は運動神経抜群の天才最強少年という訳でもないし、勇者の子孫でもないし、チート能力を持った転生者でもない。これから努力をして強くなるアニメや漫画の主人公でもない。実はスーパーマンに変身して悪の怪物と戦うという訳でもないし、外国からのスパイやマフィアといった裏社会の住人でもない。超能力者でもない。人間に見せかけた兵器でもない。

辛い経歴（他人から見れば）を持った、これから超天才を欲しいままにすることになり、将来”覚醒”することがこの時点で決定付けられた、今はまだごく普通の子供である。

「…ありがち」

まるで本当にセオリー通りじゃないか。一体誰がやったのかは知らないが。

千秋はふい、と死体から目を逸らした。かなり冷静、というよりは状況が分かかっていない、と言ったほうが正しいか。この年代はまだ夢と現実、テレビの中の世界と現実の世界の出来事の区別というか、そういうものがついていないところがあるだろうから。

てくてく、と薄く扉が開いた倉庫の出入り口に行こうとした。が。

『気に入った』

不意に聞こえた声に、千秋は立ち止まる。そして後ろを振り返る。

「だれ」

そこにはもう既に息絶えている男達しかいないはずだ。しかし、いつの間に現れたのか、そこには少年が居た。

髪から服から、黒一色の少年だ。肌の色だけが異様に白い。まるでモノクロだ。その顔は無表情。

『この光景を見て物怖じしないとは興味深い。お前、力が欲しくは無いか』

「…あやしい」

誰だってこんなことを言う少年を見たらそう思うだろう。

『疑うのも無理は無い。それに、訊くまでもなかった』

「…はなしがかみあわない」

少年は1人で喋っているかのようだ。

「けっきょくながにがいたい」

『お前を気に入った。私を使役して見せろ、九条千秋』

少年は千秋の目の前に一瞬で移動していた。モノクロの、無感情の瞳が千秋を見下ろす。千秋は驚きもせず、その姿を見上げる。

視線と視線がぶつかる。どちらも無表情。

『拒否権はない。私は、その時1番気にいった者の傍にずっといる。お前を今、最高に気に入った。その素質に』

「そう」

両者の瞳は、読めない。静寂だけが、場を支配する。

「しえきしてあげてもいいよ。きみがやくにたつのなら」

『主と認めた者の傍に、私はずっといる。お前の命令なら、例外以外従う。それに』

『お前は死ぬことが無くなる』

千秋が、初めて驚きを見せた。そして、にやりと、口端を吊り上げる。

「いいよ。しえきしてあげる。僕が今日から、お前の主人だ」

『契約は成立した。いいように私を使い』

少年の姿が掻き消えた。少年が立っていた場所には、およそこの場に似合わない剣が突き刺さっている。

装飾は豪華だ。実際の戦闘には到底使えなさそうに見える。しかし、その威圧感は普通ではない。

『かつて私は妖刀と呼ばれた。魔剣と呼ばれた。悪魔の器と呼ばれた』

千秋は剣に、手をかける。

『主の血によつて覚醒し、主の死によつて真の力を見せる。今まで、使役者は数多くいたが真の力を引き出したものはいない。お前が始めてだ、九条千秋』

するりと、千秋の手によつて剣は引き抜かれる。

『我は”血濡れの舞姫”と呼ばれた剣。その名の通り、紅く染まり舞うように仇なす者を斬る剣。お前の血を受け私は舞うだろう』

## 玖渚友

九条千秋は天才である。

彼が「血濡れの舞姫」を手にしてから2年後、丁度5歳で、アメリカはテキサス州ヒューストンにある「ERプログラム」への主席入学を果たした。

学術のさい果で、と呼ばれる「ER3システム」の留学制度が「ERプログラム」。世界各国の頭脳が集結するだけあり、「ER3システム」は相当の頭が切れる人物でないと参加することはできない。その若手育成プログラムである「ERプログラム」もまた然り、だ。全世界からエリート候補生が集まるだけ集まるのである。そこに弱冠5歳にして主席入学。当時は「ERプログラム」始まって以来の天才であると囁かれた。

だが、更に異彩を放つのは、千秋の感覚である。

募集要項には「一切の特典なし。将来の保証もしない。死して屍拾う者なし。得られるのは確かに知的好奇心を満足させうる環境のみ」とある。この募集要項を見て集まってくるのは、「ER3システム」と同じく“何より学習することが、どれよりも研究することが大好き”という意味で頭の切れた人ばかりなのである。

しかし、千秋にそんな感情は一切無い。“ただ入れそうだったから”という理由で、「ERプログラム」を受験し、見事主席で入学したのだ。

日本には飛び級制度はない。だからこそ、千秋は海外の「ERプログラム」に目をつけたのである。

他の受験生や「ERプログラム」の先輩、「ER3システム」に参加する人々を侮辱して入学したと言っても過言ではない。

が、それが普通ならばいじめの対象となったり、周囲から疎ましく思われたりする要因になるだろう。しかし、ここ「ERプログラム」

ならびに「ER3システム」では全くそんなことは無かった。元々の集まる人々の、基本的なルールがあるからだ。

ともかく、そういった経緯で「ERプログラム」に入学した千秋だが、今度はそれを普通10年のカリキュラムを、3分の1以下の3年で卒業した。

これには、あまり日本での知名度が高くない「ERプログラム」と言えども、日本でも大々的に報道された。

『天才少年、世界の超難関教育プログラムをたった8歳、しかも3年で卒業！』という具合に。

だがこれにもまた、千秋は関心を示さなかった。どうでもいい、の一言で千秋は片付けてしまった。

その後、2年だけ「ER3システム」の研究機関へと所属。その間、「世界の答えに最も近い七人」七愚人へと加わってくれないかという打診が何回も来た。しかし、千秋はこれを断固拒否。そして、周囲の人間に惜しまれながら「ER3システム」を離れ10歳の時に日本に戻った。

千秋が特に得意としていたのは、電子科学、機械工学といった機械関連の科学だった。その方面では、千秋は一躍有名人になっている。でも、千秋はどの学問もそつなくこなした。得意科目が機械関連の科学といっても、他の方面に進んでも充分その研究で稼いでいけるだけの頭脳は持ち合わせていた。

千秋がその技量を持ちながら電子科学、機械工学に進んだのは現在、日本はIT化が進み、そういった機械関連の仕事は稼ぐのが容易だと考えたからである。

そして、その技量を養った千秋は、日本に戻ったのだ。

日本に戻って1日。東京のホテルに宿泊していた千秋の元に1人の男性がやって来た。



「失礼、玖渚機関の者ですが」

「『玖渚？』」

千秋は手元にある端末を操作して喋った。

血濡れの舞姫を得てから7年の月日が経っていた。その間に生まれ持った喉の病は進行し、ついに手術をした。しかし、その手術中の事故により、千秋は声を出すことが出来なくなっていた。

彼は人口音声を使うことでしか、会話が出来ない。握っている端末は千秋が独自に開発した人工音声の端末。そのため、機械音は綺麗に消されているものの声には抑揚が無い。

「『玖渚とは、あの？』」

「ええ。私はその、使いの者です。実は、玖渚直様があなたにお会いしたいと」

「『玖渚、直？それって、機関長の秘書の玖渚直ですか？』」

「いかにも」

玖渚機関は、この国の人間ならば1度は聞いたことのある名前だ。いくら天才と呼ばれていても、その偉い人が自分に何の用か。

「お時間はございますでしょうか」

「『特にこの後の予定は決まっていますからね…分かりました。一緒に行きましょう』」

「恐れ入ります」

使いの者は、深々と頭を下げた。

直との面会は、普通に終了した。ただ直が普通にお世辞的なことを言っ、ヒューストンでの話を聞いただけだった。

千秋も普通にそれに答えた。別に聞かれて困るような話でも、ない。しかし、最後に直は千秋に1つお願いをした。

「高貴なる私の、高貴なる妹に会って欲しい」と。

玖渚直の妹といえば、1人しか居ない。千秋と同じ年の、玖渚友。丁度友は京都、城咲のマンションに住んでいると聞いた。

数日後。京都に着いた千秋は、早速玖渚友が住むというマンション

に向かった。

「うー。直くんが言ってたER3の天才くんだよー？入って入って、うるかーむ」

マンションを訪ねて、玖渚友に会った時に言われたのはそんな言葉。中はコードだらけだ。足の踏み場もない。なんとか歩ける場所を探して、友の後についていく。

途中、仕事場というか、パソコンが置いてある部屋が見えた。玖渚機関の力か、随分いいものを持っているようだ、と千秋は思う。

千秋は、日本に戻ったら技術屋でもやろうかと考えていた。プログラムは特に得意な分野だし。パソコンについては誰よりも詳しくなつたんじゃないかと自負している。

ようやく、居間のような部屋に辿り着いた。千秋は先に座っていた友の正面に座る。

「直くんから連絡があつたんだよねー。有名な天才くんが、僕様ちゃんのところに来てくれるよう手配したってさ。お話だけでも聞かせてもらえって」

「『そうなんですか』」

一応、絶縁されているとは言っても玖渚直系だ。千秋は一応、敬語を使う。

「かたかったーい！僕様ちゃんのこと友でいいよん！あ、とゆーか自己紹介してなかった」

友はにこつと笑った。

「僕様ちゃんは玖渚友だよん！」

「『僕は九条千秋です。もともと、父親が外国人でして、アメリカではクレア・クラウドと名乗ってましたけど』」

「だから、かたいたいよっ！同年なんだしー、僕様ちゃんのこと友でいいって！T・O・M・O！フレンドの友だよん。あと敬語もなしで！」

「『…これでいい？友』」

「うんうん！僕様ちゃんはいちちゃんのことはいちちゃんて呼ばせてもらうからねっ！」

千秋、だからいちちゃんなのだろう。友の明るさに最初はついていけなかった感がある千秋だが、もういいやと思うと慣れた。

「それよりー、その人工音声！いちちゃんの自作なんでしょ？ちょっと見せてー」

「『いいよ』」

友は早速人口音声をじっくり観察し出した。

「ふえー、面白いよっ！ボタンの配列がまるでぐっちゃぐちゃだね！ふっーならこんな使いたくても使えないよっ！ぐっちゃぐちゃすぎて、どのボタンでどの言葉かぜーんぜん意味分かんないもんね！」

「“慣れちゃえば使うのは楽だよ。それに、それ設計から組み立てから何から何までやったの僕だから”」

千秋はもしものために常備している会話用メモを一枚出し、それに言葉を書いた。

「なるほどねー、うんうん、参考になったんだよ！」

友は笑顔で人口音声の端末を千秋に返す。

それから2人は、機械工学のことについて 主に千秋の「ER3システム」の話だったが をして、すっかり仲が良くなった。

## 血濡れの舞姫

九条千秋は殺人鬼である。

きっかけは他でもない、あの血濡れの舞姫を手にした時からだ。

血濡れの舞姫というのは、元は日本の刀ではない。というか、刀ですらない。

この武器については、どこから見つかったのかも分からない一冊の文献に詳細が書かれている。

妖刀、魔剣、悪魔の器、その他色々な名前で呼ばれる血濡れの舞姫だが、本当の名前はない。千秋は、略して舞姫と呼んでいるが、それは勿論のことあだ名であり、血濡れの舞姫という名もまた、本来の名前ではない。

文献によれば、この剣についての伝説が書かれている。

昔、とある小国。その時、その国は領土を広げるために周りの国と戦争をしていた。

その国には1人の王子がいた。

王子は圧倒的なカリスマ、類稀なる武の才能、天才と呼ばれる頭脳を持った王子だったという。

その王子は指揮官としてではなく、王の命令に従い、兵を率いて国の領土を率いるために常に最前線で戦った。

その姿は舞うように美しく、敵も味方も魅了した。浴びた返り血さえも美しく。その場にいたものを余すことなく、惹きつけた。

人々は王子を、こう呼んだ。

「血濡れの舞姫」。

だが、戦を続けるうちに王子は狂っていった。彼は、血に魅せられ

ただ。

彼の殺人衝動は日に日に高まり、敵を殺すことにどんだのめり込んでいった。

味方には手を出さなかったが、戦場での彼の戦いぶりはどんどん苛烈に、残酷に、非情になっていった。

そんな折、王が死んだ。王子は亡き先代の王に代わり、王となった。王子が王となつてからでも、隣国との領土の奪い合いは続いた。王は自ら先頭に立ち、戦いの場へと駆けて行った。

彼が戦場に立てば、国が敗北することなどはなかった。また、王は政治も出来た。

国民は王の殺人衝動は気味悪く思っていたが、何よりそのカリスマにより、王に従った。

やがて、小国は立派な大国となっていた。だが、それでも王は飽き足らず、周りの国と戦争を開始した。

そこでも勝ち続けた。まるで敗北など、王は知らなかった。王の武と策により、周りの国は見る見る倒されていった。

周りの国の王や將軍は、王を「死塗りの狂王」と呼び、恐れた。いまや誰も、王に敵うものはいない。

だがしかし、ある国だけは違った。その国は王を畏にかけた。王らしくない失態で、王は捕らえられた。

王は殺された。公開処刑だった。

しかし、王が死んだ次の瞬間、王を殺した兵がかつと目を見開き、叫んだ。

『私の魂は決して死ぬことはない！私は永遠だ！肉体は死しても、我が魂は死なぬ！そして私に仇した者よ、その命、無いと思うがい！』

そして兵はその場に倒れた。兵士は、既に絶命していた。

処刑した国の王と国民は王を恐れた。急いで王の魂を、1本の剣に封じ込めた。

それから恐れあまり、王の国の国民を1人残らず殺した。国は事

実上滅びた。

しかし、その１年後には、滅ぼした国に原因不明の病が流行し、その国もまた、滅びたのだという。

それから、王の魂が封じ込められた剣は、滅びた国を偶然訪れた旅人に拾われ、その旅人から別の人間へ、そしてまた別の人間へ、というふうに渡って行った。

その剣は、こう呼ばれた。「血濡れの舞姫」と。

最初この話を聞いた千秋は「バカバカしい」の一言で一蹴した。信じられるか、とばかりに。

しかし、その話を裏付けるかのように、血濡れの舞姫には大きな特徴があった。

まず、定期的に殺人衝動が起こるという事。それは血濡れの舞姫が血を求めるからだ。また、他人の血を浴びれば浴びるほど、血濡れの舞姫の切れ味は増す。

次に、戦闘能力、学力、カリスマ性の面で補正がつくという事。簡単に言えば戦闘能力などが増すのである。千秋が「ERプログラム」に主席で入れたのも、これのお陰と言ってもいい。（あくまで”主席で”ということの間違えないで頂きたい。千秋はそのままでも、このまま「ERプログラム」に入学してしまうくらいの学力は持っていた。）

そして、特筆すべき事項は、”血濡れの舞姫は使い手の血を浴びると覚醒し、持ち手の戦闘能力と血濡れの舞姫の攻撃力がさらに増大する”ということである。

血を浴びれば浴びるほど切れ味が増す剣。それが血濡れの舞姫。しかしあくまでも自分＞他人だ。

攻撃力は一旦覚醒状態が解除されれば元に戻るが、大人数を相手にした時、相手が千秋を傷つけた時に相手の方が不利になるということが分かるだろう。

もう1つだけ、これが最上の特徴と呼べるものがあるが、今は控え  
ておこう。

ゆえに千秋は殺人鬼なのである。

だがまだ、”あの名前”は持たない。

まだあの家賊と会うのは、少し先の話なのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8413z/>

---

零崎姫識の人類観察

2011年12月27日19時47分発行